

〔研究ノート〕

戦後の師範学校における音楽教育実践

— カリキュラム・実態に着目して —

鈴木 慎一郎*

はじめに

本稿の目的は、戦後の師範学校における音楽教育実践を明らかにすることである。

佐藤学は「戦前から戦後への転換は制度的には連続性を持っていた」と述べる¹。長木誠司は「形式としての＜音楽教育＞は、1941年の国民学校発足時にすでに整えられており、GHQの政策はそうした基礎の上に、イデオロギー的な変更を加えていったものに過ぎない。その意味で、戦後の＜音楽教育＞は、戦前からの連続線上に位置しており、それなくしてはGHQの改革も功を奏さなかったはずである」と述べる²。菅道子は「戦時期から戦後への連続面、非連続面を明らかにしていくためには、そこでの目標観、教材観、指導原理、指導方法または児童観の、何が、いかなる形で戦後に引き継がれ、あるいは断絶したものになっていったのかを教育理念・制度との構造的な把握のもとに明らかにし、歴史像を積み上げる作業が必要である」と言及する³。このように戦前と戦後を連続的に捉えようとする指摘が教育学、音楽学、音楽教育学といった複数の分野の研究者からなされているものの、教員養成の側面については明らかにされていない。特に各道府県に設置されていた師範学校が戦後に担っていた役割や実態を解明することは、重要であると思われる。そこで本稿では、1945（昭和20）年8月から師範学校が廃校となる1951（昭和26）年3月までを対象時期とする（学芸学部・教育学部の発足は1949年5月）。

戦後の師範学校は、5年7ヶ月と限られた存在期間であったにもかかわらず、この時期、師範学校附属小学校を中心にコア・カリキュラムに基づく先進的な実践が展開される⁴（新潟第一師範学校男子部附属小学校の「新潟プラン」、兵庫師範学校女子部附属小学校の「明石プラン」、奈良師範学校女子部附属小学校の「吉城プラン」、愛知第一師範学校女子部春日井附属小学校の「春日井プラン」等）。この点からも戦後の師範学校を取り上げる価値は高いと考える。

先行研究を概観すると、東京第一師範学校に関しては、北上正行⁵、浜田博文⁶、陣内康

*短期大学保育科

Shinichiro SUZUKI : Music Education Principle at Teachers' Colleges after World War II — Its Curriculum and the Achievements

彦⁷，橋本美保⁸，山崎奈々絵⁹等複数の教育学の研究者によって明らかにされている¹⁰。しかしながら，これらの研究は制度史ということもあり，カリキュラム全体の特徴や変遷等を指摘するということとはなされているものの，各教科の内容や実態についてまで明らかにされていない。一方，音楽教育学を専門とする岩上行忍¹¹，後藤重樹¹²，河口道朗¹³，木村信之¹⁴が一部取り上げてはいるものの，自らの実体験を振り返った回想に留まっている。このように音楽教育実践に焦点を絞った戦後の師範学校に関する先行研究がないのが現状であり，こうした研究状況下を補完する作業として本稿を位置付ける。

ところで，江利川春雄は「戦前では文部省令と現場の実態との乖離は珍しくなく，中央法令のみから演繹的に各校の実情を推測することは危険である」と述べる¹⁵。これまでに筆者は「師範学校規定」が改正された1931（昭和6）年4月から敗戦の1945（昭和20）年8月までにおける師範学校の音楽教育実践に関して取り組み，江利川の言及を活かし，法規分析，教科書分析のみならず，研究方法として聞き取り調査を積極的に用いてきた¹⁶。そこで戦後の師範学校の音楽教育実践に関しても法規，教科書，実態の視点から検討したい。具体的には第一に「師範学校規定」等の法規において音楽のカリキュラムの位置付けを明確にし，さらに大学沿革史における戦後の師範学校に関する記載を概観する。第二に戦後の師範学校の卒業生を対象とした聞き取り調査から得た証言に基づき実態を考察する。なお，1946（昭和21）年6月，暫定教科書である文部省『師範音楽 本科用』が発行される。この教科書の分析については，紙幅の関係上，本稿では取り上げず，別稿で行う予定である。

1. カリキュラム

1) 法規

1946（昭和21）年3月，師範学校規定中改正（文部省令第十二号）され，毎週授業時数は，表1のように改正された¹⁷。1943（昭和18）年のカリキュラムでは，必修の「基本教科」と選択の「選修教科」に大別されていたけれども¹⁸，1946年では行われていない。「国民科，理数科，家政科，体錬科，芸能科，外国語科」と合科で表記する方法は変わっていない。1946年では，「教育科」がなくなった一方，「外国語科」が男女とも週4時間課され，英語教育が重視されていた動向がうかがわれる¹⁹。女子のみ「家政科」，男子のみ「修練」が開講され，授業時数についても男子には「理数科」や「工作」の時数が多いといった性によるカリキュラムの違いが見受けられる。

「芸能科」は「音楽・書道・図画・工作」によって合科で構成され，「音楽」については男女とも週2時間となっている。

表1 1946（昭和21）年「師範学校規定中改正」における毎週授業時数

教科科目		男子 毎週授業時数			女子 毎週授業時数		
		第1学年	第2学年	第3学年	第1学年	第2学年	第3学年
国民科	修身	2	2	2	2	2	2
	国語	5	4	4	5	4	4
	歴史 地理	3	3	3	3	3	3
理数科	数学	5	5	6	4	4	4
	物象 生物	6	7	7	5	5	5
家政科	家政				1	4	4
	育児 保健 被服				4	4	4
体錬科	体操	3	3	3	3	3	3
芸能科	音楽	2	2	2	2	2	2
	書道	1	1		1	1	1
	図画 工作	3	3	3	2	2	2
外国語科		4	4	4	4	4	4
修練		4	4	4			
毎週授業総時数		38	38	38	36	38	38

出典 石川謙代表『近代教育制度史料』第24巻，大日本雄弁会講談社，1957年，478頁から作成。

注 下線は筆者による。

1946（昭和21）年3月31日に出された「米国教育使節団報告書」には以下のように記される²⁰。

師範学校は、もっと優れた専門的（教師としての）準備教育と、更に十分なる高等普通教育を施すように、一層高い基準で再組織されなくてはならぬ。（中略）

最低基準の範囲内で、各師範学校の教授たちは、師範学校のカリキュラムを決定したり、また必要に応じて時節それを変更したりする自由を持たなくてはならぬ。これは、でまかせにやるのではなくて、利用し得べき手段を徹底的に研究して、十分な議論を尽した後に、行われなくてはならぬ。師範学校は、免許及び授業に対する標準を保持する上に必要と思われる場合を除いては、政府職員から特定の指令を受けずに、教育の理論と実際を発展させる自由を持つべきである。そのカリキュラムは、将来教師たるべき者を一個の個人として、また公民として教育するようにしなくてはならないのであるから、自然科学，社会研究，人文科学，及び芸術などのような普通科目の面に重きを置く必要がある。児童の研究は教師養成の準備教育中、特に重要なものでなくてはならぬ。カリキュラムには家庭と学校との関係の研究を設

けるべきである。到る処で見学、関与、及び教生実習に対してもっと多くの時間が与えられなくてはならぬ。各師範学校は、教師の再教育のために、講習、授業実演、会議、討論会、及びその他の手段を講ずべきである。なおまた、この重要欠くべからざる教師の地位を、専門的最高水準に保つために、師範学校教授たちの資格が高められるような方法を、綿密に研究することが必要であろう。同様に、物的施設、財政上の援護、及び行政上の管理等に関して、徹底的な調査の必要が指示される。教師の養成教育に関係のある学校及び職員の自発的な連盟は恐らく、教育に従事するすべての者が深い関心を有する多くの問題を、明らかにするための良い手段となることであろう。

1947（昭和22）年1月18日、学校教育局師範教育課長が師範学校長宛に出した「学科課程案の研究について」には以下の通りである（発学十七号）²¹。

従来この内容や運営の仕方までも、全国一律に文部省が決定し指示して来たのですが、民主主義の見地から考えて今後もそういう仕方によいでしょうか。教育者がみずからの現場における経験に立脚し、深い反省の上に、これからの新しい社会が要求する最もよい教育はどのようにして作られるべきかについて全員協議を重ね、練り上げた案を文部省に提供し、文部省と全日本の現場人の衆知を集めておおまかながら国としての方針を立て、地方の実情に即するよう自由裁量の余地をできるだけ多くして運営のことは学校の自由と責任に委ねる方が实际的でもあり民主的でもあるのではないのでしょうか。さて制度のわくが確定するのを待つて内容の研究調査を始めるのでは今の貴重な時間を空費することになりますと共に、内容を見捨ててわくを確定するということは許さるべきことでありません。そこで私は貴官に教官各位（附属校の教官を含めて）の御協力をお願いして貴校独自の理想的な学科課程案を作つていただきたいのであります。そうすることが実に、近く設置せらるべき教育養成学校を上から与えられるものとして受け取るのではなく、各位みずからの生みの苦しみの体験を経て成つたものとして必ずりつばに育てあげていただくようになるために、最も望ましいと信ずるのであります。

このように「米国教育施設団報告書」「学科課程案の研究について」とともに、各師範学校にカリキュラムの独自性を求めていることが読み取れる。では、各師範学校の学科課程はどうであったのだろうか。この点については次項で取り上げたい。

2) 沿革史

ここでは大学沿革史における各師範学校の学科課程に関する記載を概観する。表2は、

1946（昭和21）年3月の「師範学校規定中改正」が出される直前の1946（昭和21）年1月15日の東京第一師範学校男子部の学科課程である。音楽は各学年毎週2時間確保されている。

1946（昭和21）年4月22日には、単位制によるカリキュラムを編成し、本科2年以上を文科・理科に分けて専修させる。この方法により、文・理科専修制度は生徒に専門知識をふかめる希望を持たせ、従来とは違った、自信と意欲を持たせている。さらに、1946（昭和21）年9月17日、「一般・職能・専修・選択」の4課程を設け、共通・必修の他、特に1科目専攻の単位数を強化している²²。

表2 東京第一師範学校男子部 学科課程 1946（昭和21）年1月15日

出典 『東京学芸大学二十年史：創基九十六年史』1970年、665頁。

	予科1年	予科2年	本科1年	本科2年
修身公民	0 (1)	0 (1)	0 (2)	0 (2)
国語漢文	4 (5)	5 (5)	4 (4)	2 (2)
歴史地理	2 (4)	2 (3)	0 (3)	0 (3)
教育	／	／	3 (2)	3 (2)
心理衛生	／	／	1 (3)	1 (2)
数学	4 (4)	5 (5)	3 (2)	2 (2)
生物	4 (6)	4 (6)	4 (5)	2 (3)
農商	2 (0)	2 (0)	2 (3)	2 (3)
職業	0 (3)	0 (3)	0 (2)	0 (2)
体育	2 (4)	2 (4)	2 (4)	2 (4)
音楽	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)
書道	2 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
図工	1 (3)	1 (3)	1 (3)	1 (2)
外国語	3 (3)	3 (3)	／	／
選択	／	／	／	4 (6)
専修	0 (4)	0 (4)	0 (4)	0 (4)
研究	／	／	1 (0)	2 (0)
計	29(40)	29(40)	29(40)	29(40)

() 内の数字は規定による授業時数

東京第二師範学校女子部の1946（昭和21）年2学期の学科課程が、表3である。新教育精神に基づくカリキュラムの改編で、従来のいわゆる「師範型」から脱して、生徒の研究意欲を促そうとするもので、文科、理科、家政科の何れかを専修させ、芸能科および体育科から1科目以上を選択させている。1948（昭和23）年には、「一般課程、基本課程、専攻課程、および教職課程」に類別して、各課程に講義科目が配列される。翌1949（昭和24）年度からの大学昇格を見越しての移行措置である²³。

表3 東京第一師範学校女子部 学科課程 1946（昭和21）年10月以降

出典 『東京学芸大学二十年史：創基九十六年史』1970年，694頁。

学 年	学 科	文 科 理 科 家 政 科											外国 語科	自 由 研 究	計			
		社会 研究	教育 研究	心 理 学	哲 学	国 史	地 理	数 学	物 理	生 物	家 政	保 健	音 楽			図 工	体 育	農 業
一 学 年	基本	二・	二	二	一	二	二	三	二	一	二	二	一	一	一	二	二	二
	専修																	
	選択																	
二 学 年	基本	一	二	一	一	二	一	二	二	二	二	二	一	一	一	二	二	二
	専修					二	二	二	二	二	三	三	三	三	三	三	三	三
	選択												一	一	一			
三 学 年	基本	二	一	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	専修					三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
	選択	①・③	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

次に愛知第一師範学校を見てみたい。1946（昭和21）年7月の学科課程が表4である。「師範学校規定」にほぼ準拠し，修身・日本歴史・地理の授業が1945（昭和20）年12月末日に停止されたため，修身公民は公民のみを実施した²⁴。音楽は1946（昭和21）年3月の「師範学校規定中改正」と同じく，各学年毎週2時間，確保されている。

表4 愛知第一師範学校男子部 1946（昭和21）年7月 学科課程

科 目	本科3年	本科2年	本科1年	予科2年	予科1年
公民	1	1	1		
哲学	3	1			
国語	2	2	3	3	4
漢文		1	1	1	
外国史	2	1	2	2	
教育	2	2	2		
心理		1	2		
衛生	1	1			
数学	2	2	3	5	4
物象1		2	2	2	2
物象2	2		2	2	
生物	2	1	1		6
農業	1	1	1	1	12(農業業作)
音楽	2	2	2	2	2
書道		1	1	1	
図画	1	1	1	2	
工作	1	2	2	2	
体操	2	2	2	3	
英語	2	2	2	4	4
修練（自由研究・スポーツ）	3	3	3	3	2(作業)
選修	4	4			
合計	33	33	33	33	36

出典 愛知教育大学史編さん専門委員会『愛知教育大学史』1975年，90頁。

表5は、1946（昭和21）年11月以降の学科課程である。学科課程を大幅に改正し、同月11日、全校生徒に新学科課程の説明会を開いた。新学科課程は、本科の課程を前半と後半に区分し、前半（本科1年と本科2年前半）は必修科目のみとするが、後半すなわち本科の2年後半から本科3年にかけては基本科目の時間数を大幅に削減し、選択科目の授業数を増加。選択科目は、文科一部・同二部、理科一部・同二部に分類して、学生の希望によって、その選択分野を決める。かつて基本科目として必修とされた音楽・図画・工作・書道を、本科1年と本科2年前半期では必修とするが、本科2年後半期と本科3年では、そのうちの1科目を必修とした。

表 5 愛知第一師範学校男子部 1946（昭和21）年11月以降
出典 『愛知教育大学史』1975年、91頁。

計		科目										前 半 （本科 二年）	後 半 （本科二年 後半、本科三年）									
		操	道	作	画	楽	業	生 物	数 学	外 語	地 歴	国 漢	心 理	法 経	倫 理	科 目	時間					
三〇		二	一	一	一	二	二	二	三	三	三	三	二	二	一							
備考 年三五週ヲ予定スル	技能科自由一科目 二時	自 由 選 択 科 目	計		国 語	地 理	歴 史	法 学	社 会	文 科	選 択 科 目 （音、図、工、書、体ノ内一科目ヲ必修選択）	計	技 能	体 育	外 語	教 育 心 理	哲 学	社 会	科 目	時間	基 本 科 目	考
			一		二	二	三	三	五	外 国 語		文 科 一 部	一		一	四	三	一	二	五	一	
			二		二	三	三	三	三	五		外 国 語	文 科 二 部	二		三	一	二	五	二	一	
			計		地 球 物 理 学	三	三	三	三	三		三	理 科 一 部	三		四	三	一	二	五	二	
			一		二	三	三	三	三	三		三	理 科 二 部	二		三	四	五	六	七	八	
			計		自 然 科 学 史	二	二	三	三	三		三	理 科 一 部	一		二	三	四	五	六	七	
			一		三	四	五	六	七	八		九	理 科 二 部	二		三	四	五	六	七	八	
			計		自 然 科 学 史	二	二	三	三	三		三	理 科 一 部	三		四	五	六	七	八	九	
			一		三	四	五	六	七	八		九	理 科 二 部	二		三	四	五	六	七	八	
			計		自 然 科 学 史	二	二	三	三	三		三	理 科 一 部	三		四	五	六	七	八	九	

その他、栃木師範学校男子部では、1946（昭和21）年度、「改革委員会」が発足し、教官と生徒たちの間でカリキュラム問題についての話し合いを行い、専門を重視するカリキュラム作りに着手する。1946（昭和21）年度後半（3学期頃から）「専攻制」を取り入れたカリキュラムが実施される。1947（昭和22）年度、更に専門化が強められた。これまで専門に分かれて授業を受けるのは週に1日程度だったものを、2日ないし2日半に増やし、さらに自由研究の日を一日設けられる。生徒は、共通科目は各クラス単位で受講するが、専門に分かれて授業を受ける日は次のようにそれぞれの専攻に分かれて授業を受ける。

- 文科（2クラス、80人、国語・哲学・歴史・地理・英語・教育心理の専攻生徒）
- 理科（1クラス、40人、物理・化学・生物・数学の専攻生徒）

芸術科（1クラス、40人、音楽・美術・体育・農業の専攻生徒）

1948（昭和23）年度以降、戦後の師範学校として一応の完成を見た時期で、授業科目は「一般教養科目・教職的教養科目・専修科目」に大別される²⁵。

兵庫師範学校男子部では、1946（昭和21）年秋頃、カリキュラムの改造に着手され、今までの平均化した学級編成による一斉的な学習ではなく、専攻コースの新制度による単位制新カリキュラムとなる。兵庫師範学校最後の1948（昭和23）年4月には、男女共学、新制大学への移行期のカリキュラムで、「一般教養・専門教養・選択・教職」に大別される²⁶。

山梨師範学校男子部では、1946（昭和21）年4月、本科3年に対してのみ文理科制度（文科2クラス、理科1クラス）が試験的に実施。新制中学校の教員を養成しようという目標と専門的に深く究めたいという生徒の要請を受け、試験的に行われた。1946（昭和21）年秋の運動会を終えた直後から、本科3年の実績がかわれて、本科1、2年に対しても全面的に文理科制度が実施される。さらに、1947（昭和22）年度頃、卒業論文の作成が卒業資格の一つに加えられる²⁷。

以上、カリキュラムに関しては、1946（昭和21）年3月の「師範学校規定中改正」が出され、「音楽」の毎週授業時数は各学年2時数であった。1947（昭和22）年1月に出された「発学十七号 学科課程案の研究について」では、「貴校独自の理想的な学科課程案を作つていただきたい」と記されていた。その後は、東京第一師範学校が先進的な役割を果たすとはいうものの、師範学校ごとにカリキュラムの改正が行われた。実施時期は各校に異なるとはいうものの、おおむね次のような傾向がみられた。

文科・理科に分けて専修 → 一般・教職・専修等ごとに単位を取得

このようにカリキュラムは、新制大学で実施されるカリキュラムに近い形に改正されていった。またこのカリキュラムでは、生徒の希望に応じ、授業を選択するという行為が保証されている。しかしながら選択に伴い、音楽を選択しないという方法も生まれた。ちなみに選択性については戦後に始まったことではない。1931（昭和6）年の「師範学校規定中改正」以後、「増課科目」が新設され、生徒の希望に基づき、教科を選択できるようになった。また、1943（昭和18）年の昇格後においても「専修教科」という名称で継承される²⁸。したがって、カリキュラムにおける選択性・専門性については、戦前と戦後の連続面が確認できる。さらに、戦後においては、中等教員養成の機能が課せられたことが強く影響している²⁹。

2. 実態

後藤は「終戦となった大学の学校社会の中では一層ひどいものとなった。校舎は焼けて

しまい、施設設備はほとんどない状態の上に、毎日食物を追わなければならない有様で、焼け残った校舎によりやく1台の古ピアノ3名の教師、練習用オルガン4台を修理しながら約500名の学生に対したもので、音楽教育の内容は想像できるはずである」と回想する³⁰。ここでは戦後の師範学校に在籍した卒業生の証言を基に、当時の状況を考察したい。聞き取り調査対象者に共通する点は、卒業後、小学校、中学校、大学等に教員として就職し、戦後の音楽教育に携わっている方である³¹。

表6は、香川師範学校の卒業生から得た証言を一覧にしたものである³²。男子部は高松市、女子部は坂出市にあり、高松市にあった男子部は空襲に遭い、校舎を焼失した。そのため、ピアノ・オルガン等の楽器環境が整っておらず、十分な音楽教育を実施することができなかった。一方、女子部は、空襲の被害を受けず、音楽理論を中心に置いた指導が尾形氏により熱心に展開された³³。そのような状況の中、1948（昭和23）年「香川師範学校第一回音楽会」が男子部女子部合同で開催され、男子部の生徒であった渋谷氏が《ペチカ》³⁴や《朝だ元気で》³⁵を独唱している（図1）。

表6 聞き取り調査 香川師範学校

校名	香川師範学校男子部		香川師範学校女子部	
対象者	渋谷清寿氏		鬼無玲子氏	入谷千代子氏
在籍年	1943 (S18) 年4月予科入学 1945 (S20) 年4月本科進学 1948 (S23) 年3月本科卒業		1944 (S19) 年4月本科入学 1946 (S21) 年3月本科卒業	1946 (S21) 年4月本科入学 1949 (S24) 年3月本科卒業
設備・環境	1945 (S20) 年7月4日、高松空襲により、本部・男子部が全焼			
音楽教育	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽科教員…鈴木武五郎氏 ・予科の時代には「オルガン・ピアノ検閲」「聴覚訓練」等の音楽の授業があったものの、空襲を受け、楽器等が全焼してしまったため、戦後は十分な音楽教育を受けることができなかった。鈴木先生も「申し訳ない。音楽の授業は女子師範に任せなさい」と生徒たちに詫びていた。 ・1946 (昭和21) 年8月、復興資金募集のために、音楽会が行われた。その収益金でピアノを1台購入した。 ・1948 (昭和23) 年2月7日、師範学校講堂 (旧丸亀兵舎) で戦後「第一回音楽会」が開催された。渋谷氏は、《ペチカ》を独唱した。 		<ul style="list-style-type: none"> ・音楽科教員…尾形サダ氏 ・空襲に遭遇していなかったため、戦後も音楽の授業を実施できた。 ・音楽理論（楽典、初歩の和声学）中心の授業。生徒たちからは「内容が難しい」との評判であった。声楽はあまり行わない（声楽の個人レッスンはなかった）。オルガン・ピアノは、希望者のみ個人指導を受けた。 ・地方実習でお世話になった高松市立鬼無小学校へお礼としてカスタネット1箱を贈った（戦後、簡易楽器を用いた音楽の授業研究が行われていた）。 ・教員免許は小学校の他、中学校の音楽と社会を取得した。中学校教諭免許は申告制で2教科申告できた。中学校教諭免許に関する専門教育はほとんど受けていない。 ・附属幼稚園には、1週間程度、観察に出掛けた。幼稚園教諭免許は申請していない。 	
聞き取り調査	<ul style="list-style-type: none"> ・2004年5月9日 ・2004年9月28日 ・2005年3月16日 		・2005年3月16日	

プログラム		第二部	
第一節		第二節	
1. 合唱	本二 高 沢 生	1. 合唱	志原小 学校 児童
(イ) あの山び(上四地の方より)	手時松 雅彦 佐田誠也	(1) A) 花	B) 花の歌
(ロ) モーリス	鈴木 弘	(2) A) 路ばら	B) とうだいもり
(ハ) ステンコラージン	ワシヤ 隆雄 竹野 大樹 尾	(3) A) 花の葉	B) みかんの花畑(丘)
2. ピアノ独奏	本三 三 木 一 治	2. ソプラノ独唱	吉 賀 美 子
(イ) アラフ(聖イザナ)	シロベシ	(イ) 空達の心	バイゼリオ
(ロ) クスツ(聖イザナ)	シロベシ	(ロ) 山々の木山	山田 義 孝
3. 独 唱	本三 三 木 一 治	(ハ) 思ひ小窓	高木 成 仁
(イ) モーリス	シロベシ	(ニ) 歌劇「ルサア」狂気の場より	ドムゼフティ
(ロ) 路ばら	シロベシ	歌者の境地を獲ひ	
4. オイストラ独奏	本三 三 木 一 治	3. 合唱	高松高 女 学 校 婦 子
(イ) モーリス	シロベシ	(イ) 高 松	シロベシ
(ロ) 路ばら	シロベシ	(ロ) 中興地方の子守歌	山田 義 孝
5. 独 唱	本三 三 木 一 治	(ハ) シロベシの子守歌	山田 義 孝
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		
6. ハーモニウム独奏	本三 三 木 一 治		
(イ) 山田義孝	山田 義 孝		
(ロ) 山田義孝	山田 義 孝		
7. 合唱	本三 三 木 一 治		
お祭りの歌	本三 三 木 一 治		
8. ピアノ独奏	本三 三 木 一 治		
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		
9. 独 唱	本三 三 木 一 治		
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		
10. ピアノ独奏	本三 三 木 一 治		
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		
11. 独 唱	本三 三 木 一 治		
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		
12. 合唱	本三 三 木 一 治		
(イ) モーリス	シロベシ		
(ロ) 路ばら	シロベシ		

図 1 1948(昭和23)年 香川師範学校第一回音楽会 プログラム

出典 『わが香川師範時代』1996年, 32頁。

表7は、岡山師範学校男子部の卒業生の証言である。岡山も空襲に遭遇したものの、音楽教室は鉄筋校舎の中にあつたため、焼失を免れている³⁶。しかし、生徒の練習の場であつた木造の個室の練習室については焼失したため、楽器の台数が限られていた³⁷。

表 7 聞き取り調査 岡山師範学校

校名	岡山師範学校男子部	
対象者	坂口進氏	棚田国雄氏
在籍年	1949(S24)年9月本科第2学年編入 1951(S26)年3月本科卒業	1946(S21)年4月予科入学 1950(S25)年4月岡山大学教育学部Ⅰ類 初等教員養成4年課程入学 1954(S29)年3月岡山大学教育学部卒業
設備・環境	1945(S20)年6月29日、岡山空襲により、鉄筋1棟・寄宿舎1棟・食堂以外を焼失。ただし、音楽教室は鉄筋の中にあつたため、焼け残る。木造の個室の練習室については焼失。	
音楽教育	<ul style="list-style-type: none"> 音楽科教員…難波正氏、森豊幸氏 音楽の教科書はなく、教員が譜面を板書したものを歌った。 ピアノの指導は、音楽教室の隣にあつた教官室のピアノを使用して個人レッスン。各自の練習は、鉄筋校舎の階段の踊り場や廊下に置いてあつたオルガンやピアノを使用。台数が少なかったため、早く登校して楽器を確保した。ただし、男子生徒の大部分はスポーツに熱中していたため、音楽に対しては熱心ではなかった。 	
聞き取り調査	・ 2003年10月24日	・ 2003年10月3日 ・ 2003年10月24日

表8は、愛知第一師範学校女子部の卒業生の証言である。名古屋市西区にあった愛知第一師範学校女子部の校舎は空襲で焼失し、1946（昭和21）年2月、春日井市の牛山（陸軍航空隊兵舎跡）へ一時、移転した³⁸。バラック建ての兵舎という十分な環境とはいえないものの、秋田氏は熱心に音楽に取り組んでいる³⁹。

表8 聞き取り調査 愛知第一師範学校

校名	愛知第一師範学校女子部
対象者	秋田照子氏
在籍年	1945（S20）年4月本科入学 1948（S23）年3月本科卒業
設備・環境	1945（S20）年3月12日、空襲により寄宿舎および新館等焼失（5月14日の空襲で全焼）。
音楽教育	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽科教員…水野久一郎氏（主に器楽，理論），鈴木佐太郎氏（主に声楽），田村範一氏（男子部） ・「教師になる人だから」ということで，本科1年生は戦時中にもかかわらず，授業が実施された。授業の最中，空襲警報のサイレンがよく鳴り，防空壕に避難した。 ・オルガン・ピアノの検閲指導あり。教科書は，文部省『師範器楽 本科用巻一』（1943）ではなく，『バイエルピアノ教則本』を使用。愛知県津島高等女学校ではオルガンの授業はなく，師範学校入学してからオルガン・ピアノの勉強を始めた。水野先生に「指がきれい」等誉められたのが嬉しく，ピアノの練習に励む。水野先生の自宅におけるレッスンも受ける。授業があまりなかったので，ピアノを色々なところで借り，一日中練習した。 ・聴覚訓練は行われなかった。 ・教科書を支給された記憶はなく，八開村に住んでいた先輩から借りた。 ・水野先生からは作曲に関する指導も受け，卒業記念として「ソナチネ」を作曲した。 ・音楽を専門とした生徒は，30名程。その内熱心な生徒は10名程度。戦後の混乱期で学業に集中できない生徒もいた。 ・音楽の教授法に関することとしては，3年生の終わり頃に指揮法等を習った。しかし，授業の進め方，指導案の書き方等の実践的な内容は，3ヶ月行われた教育実習における小学校教員から指導を受けた。研究授業の前の2週間は，師範学校の寮に泊まり，指導を受け，準備をした。
聞き取り調査	・2006年8月11日

表9は、京都師範学校男子部の卒業生の証言である⁴⁰。京都市は空襲にほとんど遭っていないため、楽器環境も維持されていた。

表9 聞き取り調査 京都師範学校男子部

校名	京都師範学校男子部
対象者	佐橋晋氏
在籍年	1947（S22）年4月本科入学 1950（S25）年3月本科卒業
設備・環境	空襲の被害は受けていない。ただし、1900（明治33）年の建築の木造の校舎のため、老朽化。
音楽教育	<ul style="list-style-type: none"> ・空襲の被害を受けていないため、楽器は残っていた。ピアノが普及していた。 ・文科・理科に分かれて履修。 ・1948（S23）年以降、男女共学。 ・ピアノは初歩から習い、『バイエルピアノ教則本』を使用。卒業のときは、卒業演奏会でベートーベン《ソナタ悲愴第三楽章》を独奏。その他、声楽の伴奏も担当。 ・師範学校の音楽の授業では、音楽教育に関する内容はほとんど取り上げられなかった。授業の進め方、指導案の書き方等の実践的な内容は、附属小学校や地方の公立小学校で行った教育実習において小学校教員から指導を受けた。特に附属小学校では、コア・カリキュラムについて学んだ（1949年2月、京都師範学校男子部附属小学校による3日間のコア・カリキュラム研究協議会開催）。諸井三郎等の戦後の音楽教育の考え方については独学した。 ・教員免許は小学校の他、中学校の音楽と英語を取得した。中学校教諭免許は申告制で2教科申告できた。英語についての専門教育はほとんど受けていない。
聞き取り調査	・2006年8月25日

当然のことながら、空襲で校舎を焼失しているか否かによって、戦後の師範学校の音楽教育の環境は異なっていた。また、限られたデータなため断言はできないが、男子部と女子部によっても音楽教育に対する温度差が感じられ、比較的女子部の方が熱心に指導されていたようである。このことは香川師範学校男子部の音楽科教員であった鈴木氏の「申し訳ない。音楽の授業は女子師範に任せなさい」という一言にも表れている。

今回の対象者で共通することとして、師範学校の音楽科教員が担当する音楽の授業では、指導案の作成や音楽の授業の方法等、音楽教育に関する内容が取り上げられていない点である。もっぱら、ピアノ、声楽、音楽理論等音楽の内容に関する事項に留まっている。音楽教育に関する実践的な内容は、附属小学校等へ一任され実習先の指導教員から指導を受けている⁴¹。「はじめに」で述べた通り、戦後のこの時期、コア・カリキュラムに基づく先進的な実践が展開された。さらに、諸井三郎の『音楽教育論』が出版されたのが、1947（昭和22）年1月である⁴²。新しい戦後の音楽教育が始まろうとする時期にもかかわらず、それらの動向に触れられないということに、師範学校音楽科教員の音楽教育に対する意識が低かったのではないかと推察される。この点については、木村⁴³や菅⁴⁴の指摘と共通する。ただし、教育実習における証言においては、簡易楽器を用いた音楽の研究授業

が行われていたり、コア・カリキュラム研究協議会が開催されたり等、当時の先進的な実践の動向がみられる。

おわりに

戦後の師範学校では、戦前の全国一律なカリキュラムとは打って変わり、各師範学校の独自性が尊重された。各校によって多少の違いがあるものの、生徒の希望に応じた授業の選択が保障され、特定の分野を深く学ぶ専門性も見受けられ、新制大学のカリキュラムに近い内容に改正されていった。

1946（昭和21）年の「師範学校規定中改正」での芸能科音楽の授業時数は、各学年毎週2時間とされた。しかし、カリキュラムの選択性、専門性が進むにつれ、音楽は選択科目として位置付けられたり、授業時数が削減されたりする師範学校もあった。

実態に関しては、戦災の有無、男子部と女子部によって傾向は異なるが、師範学校の音楽の授業では、ピアノ、声楽、音楽理論等音楽の内容に関する指導が中心で、授業実践に関することは教育実習に一任されている傾向がみられた。岩上が「中学校教員養成の内容を充実しようとすることに急を要し、小学校教員養成の本質的研究が不足するという現象」が起きたと指摘する通り、師範学校音楽科教員の意識は、学校教育や音楽教育に対する関心は薄く、各自の音楽の専門分野に傾斜していた傾向がみられた⁴⁵。

戦前から戦後への連続面、非連続面の視点から考察すると、カリキュラムにおける選択性・専門性については、戦前にも「専修教科」が設けられていたように連続面が確認できる。一方、師範学校音楽科教員の学校音楽教育に対する意識や取り組みについては非連続面であり、戦前、国民学校「芸能科音楽」の普及の役割を積極的に果たしていた師範学校音楽科教員とは異なり、戦後は学校音楽教育に対し消極的であった。

戦後の師範学校は、初等教員養成に特化していた戦前の師範学校の機能に加え、中等教員養成の機能も加わり、そのことがカリキュラムの選択性・専門性に拍車をかけた。しかし、聞き取り調査の証言によると、中学校教諭免許は申告制で2教科申告できたのだが、特に単位や授業の規定はなく、生徒の興味の高い教科が申告されたとのことである。まさに戦後の混乱期という言葉が象徴しているように、戦後の師範学校には多くの機能が求められていたにもかかわらず、充分それらを整理できず、非常に混乱した状況であったことが推察される。なお、1947（昭和22）年、香川師範学校には保姆養成所が開設され、保育者養成に特化したコースを新設した⁴⁶。今後は、師範学校から新制大学教育学部（学芸学部）へと昇格していく中で、保育者養成、小学校教員養成、中等音楽教員養成等がどのように機能していったかについても検討していきたい。

ところで、1948（昭和23）年の香川師範学校第一回音楽会では、《ローレライ》⁴⁷や《中国地方の子守歌》⁴⁸等が合唱されたり、モーツァルトのピアノソナタ等が独奏されたり、

西洋，日本の親しみ深くやわらかい名曲が演奏された（図1）。戦時中に歌わせられたナショナリズム，ミリタリズムの濃厚な歌曲とは正反対の楽曲である⁴⁹。今後は，今回検討できなかった暫定教科書の分析を早急に行い，教材の視点からも戦後の師範学校の音楽教育実践を捉えていきたい。

〔謝辞〕

本稿を執筆するにあたり，秋田照子氏，入谷千代子氏，鬼無玲子氏，坂口進氏，佐橋晋氏，渋谷清寿氏，棚田国雄氏に調査の協力をしていただきました。その他，野間教育研究所においては資料収集の面でお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

〔付記〕

本稿は日本音楽教育学会第37回大会（2006年10月，於：千葉大学）における口頭発表を基に加筆・修正したものである。

注

- ¹ 佐藤学「教育史像の脱構築へ：『近代教育史』の批判的検討」藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編『教育史像の再構築』教育学年報6，世織書房，1997年，126頁。
- ² 長木誠司「運動（ムーヴマン）としての戦後音楽史1945～③：GHQの音楽政策Ⅱ」『レコード芸術』第53巻第3号，音楽之友社，2004年，105頁。関連する研究として，日本戦後音楽史研究会編著『日本戦後音楽史上：戦後から前衛の時代へ』平凡社，2007年が挙げられる。
- ³ 菅道子「国民学校における芸能科音楽のカリキュラム編成：明石女子師範学校附属小学校の「研究授業案」を事例として」『和歌山大学教育学部紀要』教育科学第54集，2004年，104頁。
- ⁴ 菅道子「戦後改革期におけるコア・カリキュラム編成と音楽教育」『日本の教育史学』教育史学会紀要第41集，1998年，96-114頁。
- ⁵ 北上正行「戦後教員養成カリキュラムの形成に関する一考察：「東京第一師範学校案」の分析を中心に」『学校経営研究』第17巻，大塚学校経営研究会，1992年，56-70頁。北上正行「免許法「専門職制の確立」理念の形成・具現化過程に関する一考察：文部省の取り組みの分析から」『日本教師教育学会年報』第8号 新免許法とこれからの教員養成，日本教師教育学会，1996年，98-107頁。
- ⁶ 浜田博文「戦後「学芸大学」における小学校教員養成カリキュラム論とその展開：1954年免許法改正後までの東京学芸大学の事例から」『小学校教員養成の制度とカリキュラムに関する国際比較研究』東京学芸大学教育学研究室，1996年，17-30頁。
- ⁷ 陣内康彦「東京学芸大学の沿革史に関する資料紹介」『小学校教員養成の制度とカリキュラムに関する国際比較研究』東京学芸大学教育学研究室，1996年，73-81頁。陣内康彦『東京・師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会，2005年，165-168頁。
- ⁸ 橋本美保「占領期における師範学校のカリキュラム改革：「大学に於ける教育学科のカリキュラム」の編成過程を中心に」『日本の教育史学』教育史学会紀要第46集，2003年，124-143頁。
- ⁹ 山崎奈々絵「創設期の学芸大学における教員組織の形成過程：設置申請時の教員審査を中心に」『日本教師教育学会年報』第18号，日本教師教育学会，2009年，86-95頁。山崎奈々絵「教育刷新

- 委員会の学芸大学構想：教員養成における一般教養の位置づけを中心に」『人間文化創成科学論叢』第11号，お茶の水女子大学大学院，2009年，309-317頁。
- ¹⁰ その他，下記の研究がある。『教師教育における教育科学の研究と教育に関する総合的研究：中間報告』東京学芸大学，1987年。『教員養成カリキュラムの編成・実行・評価の総合的研究：中間報告』東京学芸大学・教育学研究室，1993年。TEES研究会編『「大学における教員養成」の歴史的研究：戦後「教育学部」史研究』学文社，2001年。
- ¹¹ 岩上行忍「鳥取県における音楽教育の変遷：主として鳥取師範学校および鳥取大学の音楽科教員と卒業生について」『鳥取大学教育学部研究報告』教育科学第12巻第2号，1970年，55-71頁。
- ¹² 後藤重樹「新制大学の発足と教員養成」『音楽教育研究』8月号第14巻第8号，音楽之友社，1971年，57-65頁。
- ¹³ 河口道朗「戦後の音楽と音楽教育（10）音楽教育の新動向（その一）」『音楽教育研究』6月号第15巻第6号，音楽之友社，1972年，42-49頁。
- ¹⁴ 木村信之『昭和戦後音楽教育史』音楽之友社，1993年。
- ¹⁵ 江利川春雄「師範学校における英語科教育の歴史（1）：明治・大正期」『日本英語教育史研究』第12号，日本英語教育史学会，1997年，123頁。
- ¹⁶ 鈴木慎一郎『昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究』兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文，2006年。
- ¹⁷ 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二十四巻，大日本雄弁会講談社，1957年，477-478頁。
- ¹⁸ 鈴木慎一郎「官立専門学校昇格後における師範学校の音楽教育実践（1943-45）：保育者養成機能の増強の中で」『研究年報』第13号，白梅学園大学白梅学園短期大学教育・福祉研究センター，2008年，14-15頁。
- ¹⁹ 江利川春雄『近代日本の英語科教育史：職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂，2006年，153-156頁。
- ²⁰ 「戦後日本教育史料集成」編集委員会編『戦後日本教育史料集成』第一巻，三一書房，1982年，108-9頁。
- ²¹ 石川，前掲書，517-518頁。
- ²² 東京学芸大学二十年史編纂委員会編『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史』1970年，664-665頁。
- ²³ 同上，694頁。
- ²⁴ 愛知教育大学史編さん専門委員会編『愛知教育大学史』愛知教育大学，1975年，90-92頁。
- ²⁵ 宇都宮大学教育学部史編纂委員会編『宇都宮大学教育学部百十五年史』宇都宮大学教育学部，1989年，202-225頁。
- ²⁶ 神戸大学教育学部沿革史編集委員会編『神戸大学教育学部沿革史』神戸大学教育学部，1971年，297-300頁。神戸大学教育学部五十年史編集委員会編『神戸大学教育学部五十年史』神戸大学紫陽会，2000年，161-165頁。
- ²⁷ 丸田銓二郎編『山梨大学学芸学部沿革史』山梨大学学芸学部，1964年，227-230頁。
- ²⁸ 「1931（昭和6）年以前では履修すべき科目がすべて指定され，同年の師範学校の学科課程改正によっても増課科目は12単位，割合について全体の約7%であった。また，敗戦直前で事実上機能しなかった1943（昭和18）年の「師範学校規定」改正によっても，選修教科は，12単位，全体の10%にすぎなかった」（榊原禎宏「旧師範学校系大学における「教育学部」の成立」TEES研究会編『「大学における教員養成」の歴史的研究：戦後「教育学部」史研究』学文社，2001年，191頁）。

- ²⁹ 「中学校の教員は少なくとも二教科ぐらいを担当するのを限度とし、出来るならば専門の一教科の指導をするのが理想であり、そのためには、師範学校在学中にそれに相応した教育や研究が必要である。中学校教員においては一人で平均的にすべての教科に通じることを求めることは無理であって、それよりも各自の個性にあった教科を深く究めることによって、その関連教科をも深め得るはずであるから、大きく文科・理科に分けて、その中で更に研究の中心を一教科持つべきであると考えられて来た」（丸田編、前掲書、227頁）。
- ³⁰ 後藤、前掲書、62-63頁。
- ³¹ 聞き取り調査は、ICレコーダーとメモで記録した。
- ³² 参考となる文献については、注において掲載する。
- ³³ 「昭和22年（1947）4月から、本科生は1類（文化系）、2類（理科系）に分かれて授業を受けることとなった。たしか、3月の初めごろ、松韻寮の近くに住んでいた板谷実平女子部長宅に数人の代表が訪れ、「私たちのクラスは予科1年の時からずっといっしょに勉強し、戦時中は命がけで戦火をくぐった仲間同士だから、今更クラスを二つに分けるようなことはしないでほしい。」と願い出た。しかし女子部長は「それは制度だから仕方がないんだ。」と言って説得した。ちょうどひな節句のころで、白酒を振る舞われたうえに御馳走にまでなって帰ってきてしまったというエピソードがある。文化系・理科系に分かれたといっても、理科系の人数は少なく、教科によっては同じ教官で同じ時間に授業を受けた」（香川大学教育学部百周年記念事業実行委員会『香川大学教育学部百年のあゆみ』1989年、204頁）。
- ³⁴ 山田耕筰作曲、北原白秋作詞。
- ³⁵ 飯田信夫作曲、八十島稔作詞。
- ³⁶ 神立春樹『明治高等教育制度史論』御茶の水書房、2005年、77頁。
- ³⁷ 奥山桂（昭和24年3月岡山師範学校本科卒業）「当時の思い出」岡山師範（男子）卒業生名簿作成委員会編『岡山師範（男子）卒業生名簿』1982年、156-157頁には、以下の記述がみられる。
- ・生徒側の要望を受け止めて、全員同一教科必修であった従来のカリキュラムが、2学年から文科・理科に分かれ、芸術教科は1科目選択になったこと。
 - ・カリキュラム変更後だったためか、内容がかなり高度になったように思う。訳本なしには予習が困難だった英語の授業など。また、好きな科目については一層進んだ研究をしていくような師弟の関係がいくつか生まれていたこと。
 - ・講義内容に最も苦勞されたのは教育学の先生ではなかったかと思う。西洋の教育史を訳しながら講義された先生。専らトピック的な話の中に新しい人間観・社会観・教育観などを我々に掴ませようとされた先生。
 - ・部活動やサークル活動でも多彩な活動が見られ、それに青春の情熱を発散させていた。それが行き過ぎて「代返」という現象も起きていて、それがときにはばれた。
 - ・校舎復興のために、にわか仕込みの演劇をやりつつ、師弟同行で出身地域を回った寄付金集めのこと。
 - ・岡山へ総合大学を誘致するために街頭に立ってメガホンで呼びかけた署名運動のこと。
- ³⁸ 森岡規子・永井静子「手記 終戦前後の女子部予科」『愛知教育大学名古屋分校回顧録』愛知教育大学名古屋分校回顧録編纂委員会、1970年、87-91頁には、男子部の様子が以下のように記される。
- 「おい、いよいよ今年から分科制になるぞ。」「ほんとうか、ああ、よかった。これでガンチンともお別れになれるか。」

私たち本科で入学した者が一番困ったことといえば音楽、とくにピアノであった。おぎゃあ
と生まれてこのかた20年近くも一度もふれたことのないピアノをひかなければならないからで
ある。

軍艦マーチや、戦争の歌ばかり聞かされて育ってきた私たちにとって、バイエル、チェロ
ニーなんてことばはおよそ縁なき衆生だったのである。

たまにピアノの練習をしようと思っても、音楽室のピアノはいつも、じょうずな人たちに占
領されている始末で、時々行なわれる音楽の時間の検閲など、命のちじまる思いの連続であつ
た。どうして田村先生はあんなに耳がいいんだろうと恨んだこともしばしばであった。それほ
ど苦手だった音楽も昭和22年から分科制になれば、もうやらずにすむことになったのである
から、みんなの喜びようはまた格別だったのである。

- ³⁹ 並木友之（昭和24年3月愛知第一師範学校本科卒業）「終戦直後師範生活の思い出」愛知教育大学
史編さん専門委員会『愛知教育大学史』1975年、794頁。
- ⁴⁰ 佐橋晋「音楽を伝える力」浜野政雄監修『音楽教育の研究：理論と実践の統一をめざして』音楽
之友社、1999年、319-326頁。
- ⁴¹ 関連する研究は以下の通り。水原克敏『近代日本教員養成史研究：教育者精神主義の確立過程』
風間書房、1990年（1991年再版使用）、まえがき3頁。藤枝静正「師範学校における「教育実習」
経営の特質：教育実習に関する指導・監督体制をめぐって」『子どもと教育経営』日本教育経営
学会紀要第33号、1991年、53頁。
- ⁴² 「1947（昭和22）年度の学習指導要領音楽編および音楽教科書の中心的な編成者として、戦後音
楽教育の基礎をつくった。彼の業績の特徴は次の3点にまとめられる。第1に、芸術教育としての
音楽教育の立場を明確にしたことである。（中略）第2に、器楽教育の振興を図ったことである。
第3に、民主的な音楽社会の形成を意図していたことである」菅道子「諸井三郎」日本音楽教育
学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社、2004年、769-771頁。
- ⁴³ 木村信之編著「鈴木富三」『音楽教育の証言者たち（下）戦後を中心に』音楽之友社、1986年、
106頁。
- ⁴⁴ 菅道子「戦後の「日本音楽教育学会」設立の試みとその歴史的な位置づけ」『関西楽理研究XXI』
関西楽理研究会、2004年、31-32頁。
- ⁴⁵ 岩上、前掲書、61頁。
- ⁴⁶ 水野浩志「終戦後の保姆養成の姿」日本保育学会『日本教育保育史』第六巻、フレーベル館、
1975年、160頁。
- ⁴⁷ Philipp Friedrich Silcher作曲。
- ⁴⁸ 山田耕筰編曲。
- ⁴⁹ 鈴木慎一郎「『師範音楽』（1943）における歌曲についての一考察：信時潔作曲《白楽天》を中心
に」『芸術教育実践学5』芸術教育実践学会、2004年、16-23頁。